令和５年度　江戸川区立葛西小学校　学校関係者評価　最終評価報告書

学校教育目標	○心ゆたかな子ども　○よく考える子ども ○最後までやり抜く子ども　○健康な子ども	目指す学校像 目指す児童像 目指す教師像	・保護者にとって、子どもを通わせてよかったと思える学校 ・「確かな学力」「豊かな心」「健康な体」をバランスよく備えた子ども ・人権尊重の精神に富む教師。保護者や地域との連携に努め、誰からも慕われる教師
前年度までの学校経営上の成果と課題	＜成果＞新型コロナウイルス感染症によって控えていた行事や取組を実施することができ、保護者や地域の方に本校の教育活動について深く理解していただくことができた。 外国語科や外国語活動と中学校の英語科の連携授業や算数科の研究における中学校教員からの助言、小中合同の防災訓練の実施など小中連携の推進を図ることができた。 ＜課題＞教員の授業力・指導力の向上、同時に学習用タブレットやiPadを活用した授業の展開を図り、児童にとって分かりやすい授業を実施し、基礎的学力の向上を図ること。 不登校対策支援シートの継続的な作成と、組織的な不登校対策による不登校児童を0にしていくこと。		

教育委員会重点課題	＜取組項目＞　・評価の視点	具体的な取組	数値目標	自己評価			学校関係者評価		来年度に向けた改善策
				取組	成果	成果と課題	評価	コメント	
学力の向上	＜学力の向上＞ ・授業改善の推進、学習の基盤となる基礎・基本の確実な習得、家庭学習習慣に対しての学校の組織的な対応による取組の実施・充実	○全教員の授業公開を年間1回以上実施 →児童にとって個別最適な学び、協働的な学びになっているかという視点をもつ。 ○算数科を対象にした校内研究授業を年6回実施 →児童にとって苦手とする単元を中心に研究を進める。 ○基礎的・基本的な学習内容の理解を高める。 ・「江戸川っ子 study week」を学期に1回実施 ・放課後の補習教室を年間30回実施 ○家庭学習強化週間の実施	○6年生による全国学力・学習状況調査の結果 ・国語科　全国平均以上 ・算数科　全国平均以上 ○東京ベーシックドリルにおける算数科の評価テストで正答率8割以上 ・低学年では全体の85%以上 ・中学年では全体の85%以上 ・高学年では全体の80%以上	A	B	・全国学力・学習状況調査の結果として、国語科は全国平均よりも2.8ポイント上回った。算数科は1.5ポイント下回った。 ・東京ベーシックドリルの算数科評価テストにおける正答率8割以上が、低学年では87%、中学年では82%、高学年では67%であった。 ・「江戸川っ子 study week」を学期に1回実施したことで、児童の基礎学力やICT活用能力が向上した。 ・全校規模での家庭学習強化週間を実施することができず、各学級での実施になってしまった。よって、児童の家庭学習の習慣化が十分に図ることができなかった。	B	・中学校の数学科に向けた小学校の算数の指導という視点をさらに大切にしていく必要があるのではないか。つまり、小学校と中学校のギャップをどこまで埋めるのかが大事である。 ・ICT活用はとても良いことである。ただし、放課後各家庭でのiPadの使用に関する決まりが必要である。	・算数科においては、次年度も引き続き問題を繰り返し解くという活動を実施していく。授業時間だけでなく、朝の学習時間にも東京ベーシックドリルを活用して問題を解く習慣を児童に身に付けさせる。 ・教員の校内研究を充実させる。そのために教員がどのような力を身に付けたいのかを明確にし、その実現に向けた研究を行う。 ・次年度は4月に家庭学習強化週間を実施し、保護者にも児童が毎日取り組んでいるかを把握してもらい、児童にとっても、保護者にとっても意識を高めさせていく。
	＜読書科の更なる充実＞ ・読書を通じた探究的な学習の実施・充実	○図書館ボランティアによる読み語りやお話集会の充実 ○学校図書館の本を活用した探究的な学習の充実 ・全学年、学期に1回探究的な調べ学習を行う。 ・「調べる学習コンクール」への参加を促す。 ○葛西図書館職員の巡回を活用 ・学校図書館の整備 ・探究的な調べ学習に活用できる本の紹介	○年間の読書の本の冊数 ・低学年90冊以上 ・中学年80冊以上 ・高学年50冊以上 ○「調べる学習コンクール」への参加を50人以上	A	B	・年間の読書の本数は8割以上の児童が目標に到達した。 ・学校図書館の本を活用した探究的な調べ学習を全学年で行い、本から必要な情報を得るとともに自分が調べたことを確実に見付ける力が伸びた。 ・「調べる学習コンクール」への参加が20人程と少なく、児童への参加意識の向上が課題である。。	A	・読書に対する意欲が感じられる。 ・活字離れが進む中で、学校において読書をする習慣付けを行ってもらうことはとても意義がある。 ・本が好きな児童がさらに増えてほしい。	・葛西図書館職員の方が定期的に巡回してくださるので、児童がさらに読書への興味や関心を高められるような活動について相談し、実践していく。 ・児童の読書への意欲を高めるために読書した本の冊数を日常的に記録しておけるように記録用紙を作成する。 ・「調べる学習コンクール」への参加人数を増やすために日常から探究活動に取り組ませていく。
体力の向上	＜運動意欲や基礎体力の向上＞	○「葛小遊びタイム」の実施 →全児童が体を動かす機会を作る。 ○体育授業の充実 ・主運動前の基礎的な運動を継続的に行う。 ・走る、投げる運動を多く取り入れる。 ○記録会の実施 ・長縄跳び記録会を年3回実施 ・持久走記録会	○体力テストでの結果 ・どの種目においても東京都の平均を上回る。 ○記録会の結果 ・長縄跳びにおいて全ての学級で3回目の記録が最高記録になる。 ・持久走記録会のタイムが昨年度よりも速くなる。 ○年度末の児童アンケートによる回答 ・体を動かすことが心地よいと肯定的に回答する児童が80%以上にする。	A	A	・休み時間に校庭や屋内運動場で元気よく体を動かして遊んでいる児童が多い。 ・体力テストでは、東京都の平均を上回る種目がほとんどであった。 ・長縄跳び記録会や持久走記録会を通して、運動が苦手な児童においても運動に関わる機会をもつことができた。 ・約9割の児童が体を動かすことが心地よいと肯定的に感じることができた。	A	・運動を好む児童が多いのはとても良い傾向である。まずは体力をつけることが大切なので、児童がすすんで運動に取り組めるようにしてほしい。 ・持久走を行う際には、体育の授業の中で少しでもいいので取り組む時間を確保したい。 短時間でできる運動を児童が取り組めるとよい。	・さらなる体力テストの記録向上を目標に、体育の授業の中で定期的に各種目に取り組む時間を設ける。 ・体育の授業において、主運動に入る前に簡単な基礎的な動きを高める運動を行っていく。 ・校庭で遊ぶことができる日には、基本的には全員が校庭で遊ぶようにする。運動が苦手な児童には、体を使う簡単な遊びを紹介し、継続的に取り組めるようにする。
共生社会の実現に向けた教育の推進	＜特別支援教育の推進＞ ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた個に応じた指導の実施・充実 ・エンカレッジルームの活用促進 ・副籍交流、交流及び共同学習の実施・充実	○巡回指導員主導の研修会の実施 ・個に応じた指導の共通理解を図る。 ○コーディネーターや特別支援専門員を中心とした特別支援教育の組織化 ・児童に対し連携した対応を行う。 ・校内委員会で挙がった内容について全教職員で共有し、支援の方向性を理解する。	○特別支援教室に通う児童の変容 ・支援計画における目標に達しているかの判定 ・特別支援教室を終える児童の数を年度末により多くなるように指導を行う。 ○保護者への年度末アンケート結果 ・肯定的な評価を90%以上にする。	A	B	・特別支援教室に通う児童は、成長の度合いに差はあるものの、指導を重ねるごとに学習に向かう態度、ソーシャルスキルなどの変容が見られた。 ・校内委員会で支援を要する児童について情報を共有し、対応策を検討することで組織的に指導を行うことができている。 ・特別支援教室に通う児童の保護者の90%以上が、児童の学習に対して肯定的な評価をしている。	B	・特別支援においては児童に合った授業や指導がされていることに安心感を得ている。 ・副籍児童の存在をもっと広めてもよいだろうし、実際の交流をさらに増やしていってほしい。	・特別支援教室で学んだことを通常の学級で活かせるように、学級担任と特別支援教室の指導教員との連携をさらに深めていく。そのために、それぞれの学習の様子を互いに参観する。 ・保護者と特別支援教室の指導教員や学級担任との面談だけでなく、児童が活動をする様子を見てもらい、理解を深めてもらう。
子どもたちの健全育成	＜子どもたちの健全育成に向けた取組＞ ・不登校対策の実施・充実 ・教育相談の強化 ・hypaer-QUの活用	○不登校児童分析シートの活用 ・各学級で気になる児童、不登校気味の児童におい て、必ずシートを作成する。 ○全教職員による児童理解の充実 ・週に1回の生活指導夕会を実施 ・年3回の生活指導全体会での情報共有 ○hypaer-QUを活用した学級の見直し	○不登校児童の人数 ・年度末における不登校児童数を0に近づける。 ○いじめ案件の未解決数 ・いじめによって悩んだり、苦しんだりしている児童をなくすように組織的な対応を行っていく。年度末には未解決を0にする。 ○hypaer-QUの活用 ・結果から学級の改善を図り、年度末の児童へのアンケートで、学級に所属していたことに対して肯定的な回答が80%以上にする。	A	B	・教師が児童をよく見て、細かな変化にも気付く意識を高めたことで、いじめを早期発見し、即座に対応することができている。いじめに関する未解決案件は0である。 ・hypaer-QUの活用の結果から学級の改善を図ることで、年度末の児童へのアンケートで、学級に所属していたことに対して 肯定的な回答が80%以上になった。 ・不登校児童は少ないが、不登校気味の児童は少なくはないので、不登校児童分析シートを活用し、児童理解を深め、具体的にどのような支援が必要なのかを考えていく。	A	・不登校児童が普段何をしているのかの把握をしてほしい。そして、決して関係を切らないように、教師と児童との連絡を密にしてほしい。 ・SSWやSCの活用を積極的に行ってほしい。	・学級担任だけでなく、同じ学年の教員、専科教員が児童の様子をよく見る。さらに日頃からコミュニケーションを図り児童の考えや想いを理解するなど、児童にとって話しやすい環境を作る。 ・教師は常に笑顔を絶やさず、児童の発言に耳を傾ける姿勢を保っていく。 ・hypaer-QUアンケートの結果から今後の学級経営に関する指針を定め、ゴールを意識して指導を行っていくように心掛ける。
地域に広く開かれた学校（園）の実現	＜自校（園）の取組の積極的な発信＞ ・学校（園）ホームページの充実等 ・学校（園）公開の実施・充実	○定期的なホームページの更新 ○年4回の土曜日の学校公開の実施	○保護者への学校評価アンケート ・「開かれた学校」「学校は情報を発信している」という項目において、肯定的な回答が90%以上	A	A	・tetoruからの配信が定着したことで、これまでの紙面による保護者へのお知らせだけでなく、データ化した手紙の配信により確実に保護者に連絡を行うことができるようになった。 ・学校評価アンケートにおいておよそ90%以上の保護者が「学校は情報を発信している」という項目において肯定的な回答であった。	A	・配信ができるようになり、情報がスムーズに来るようになった。 ・返信が必要なものをどうするのかが気になる。	・tetoruとホームページの充実を次年度も継続して行っていく。 ・学校公開の授業内容が年間を通して各学級において偏らないように配慮して組んでいく。
	＜学校関係者評価の充実＞ ・教育活動の改善・充実に向けた学校関係者評価の実施	○年3回の学校評議員会の実施 ・本校の学校関係者評価を活用しての教育活動の説明を行い、それに対する評価をいただく。	○学校関係者評価の結果 ・年度末に学校関係者評価の内容に関して、肯定的な回答が80%以上	A	A	・年3回の学校評議員会を実施し、学校評議員の皆様に評価をいただき、その評価を活かして自校の教育活動の見直しを行っている。	A	・教師が児童のために一生懸命に取り組んでいることがよく分かる。	・学校評議員会での議事録の作成を次年度は実現する。
特色ある教育の展開	＜小中連携教育の更なる推進＞ ・「小中を通じたカリキュラム・マネジメント」による学力の向上及び「各教科等の連携教育プログラム」による連携の充実	○小中連携の具体的な活動の充実	○教職員へのアンケート結果 ・年間を通して小中連携における具体的な活動を実施できたのかを振り返り、全教員が年1回以上は実施したとの回答を得る。	A	B	・教員へのアンケートにおいて、小中連携の具体的な活動を実施できたと回答した教員は約7割であった。主に中学校の授業参観であったが、中学校教員と指導案を作成した教員もいた。	A	・細かなところは分からないが、小学校と中学校とが連携していくことはとても大切である。小と中の連結する部分を大切してほしい。	・次年度も外国語科に限らず、中学校の教員に授業作りにおける指導や助言を仰ぐ機会を多く設定する。 ・小中連携した防災体験教室等のイベントに多くの教員が参加するように、日程や内容を考える。
	＜防災教育の充実＞ ・災害発生時の対応の場合の共助の心の育成	○防災体験教室の実施 ・夏季休業日明けにPTAと協力し、防災体験教室を行う。	○実施後のアンケート結果 ・肯定的な回答が80%以上	A	A	・9月2日にPTA、地域防災課、消防署等と連携して実施した。実施後の児童のアンケートではほぼ全員が肯定的な意見であった。	A	・今後もこの学校の特色として取り組んでほしい。	・次年度に向けて防災体験教室で学んだ児童だけでなく、全児童が関わることのできる内容や方法を構築していく。